

チャンス・チャレンジ・チェンジ



秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝

心理検査中の子どもの言動から分かること



ケース1 「答える内容が幼い、早生まれの小学1年生」

例：検査中、「時計」を「朝になったら、ちりりりーんとなるもの」、「目」を「めんめ」と表現していた。

・検査結果は発達の遅れがなく、指示の理解力も問題はなかったが、表現する内容に幼稚性を感じた。保護者が本児に対して、幼児語（赤ちゃん言葉）を使っていると思われた。「わんわん・もぐもぐ」は、繰り返しの言葉でリズムもあり、子どもにとって聞きやすく発音しやすい。また、幼児音（魚→おちゃかな、お皿→おたら）も使っていると考えられる。子どもは聞こえたように発音するので、周りの大人が正しいモデルを示さなければならぬ。いつまでも幼い扱いをしていると、幼児語や幼児音は消えにくくなる。



□検査報告時に家庭での様子を尋ねたところ、早生まれで身体が小さいこと、妹（1歳）がいることから、本児に対して幼児語で関わることが多かったと話していた。また、構音の遅れがあり、小学校入学後に通級指導教室で約2ヶ月間、言葉の指導を受けていたが、現在は利用していないことも紹介してくれた。

○子どもの年齢に合わせて言葉掛けを変えていくようにアドバイスをした。

ケース2 「3桁の数字がまねできない、数概念が形成されていない小学1年生」

例：「7・3・2」を「3・7・2」と復唱していた。また、「4」を「しち」と言ったり、カードに付いている数字を読むときに必ず1から数えて答えたりしていた。



・「平仮名や数字の読み書きが定着しない」という困り感を明らかにするために検査を実施した。年齢相応の学習を習得できる発達レベルであったが、ワーキングメモリーが極端に低く、検査中に何度も聞き漏らしが見られた。学習面に課題のある子どもに共通しているのが、ワーキングメモリーの弱さである。ワーキングメモリーは、短時間に頭の中で情報を保持して操作する能力であり、あらゆる知的活動（読書、作文、計算、推論、会話等）を支える。

□担任によるSENチェックリストでは、聞く・読む・計算する・不注意の領域に課題がある結果だった。

○聞く力やワーキングメモリーを高める支援として、刺激を減らす、覚える内容を小分けする、注意を促してから簡潔に話す、指示を理解しているか復唱させる、覚える内容を子どもの好きなことや知っている情報と重ねたり意味付けたりする、視覚情報を活用する、やるべきことをリストにする、神経衰弱やカルタ取りを楽しく行う、意図的に伝言やお手伝いをお願いしてレベルを上げていく等を伝えた。

ケース3 「言語レベルは良好であるが、相手との距離感に無頓着な中学1年生」

例：初対面の私に、「本日は私のためにわざわざお越しいただき、誠にありがとうございます」と挨拶をしたり、「～でございます、～でございます」と過度な丁寧な言葉を使ったりしていた。

・小さな消しゴムを握りしめたり、質問に納得してから答えたりする姿に、不安な気持ちが強いと感じた。数字を復唱する検査になると、ニヤニヤ笑いながら回答する態度に違和感を感じた。

□友達に対しても丁寧語や謙譲語を好んで使っているが、本人はおかしいと思っていない。メモを取る習慣があり、ノートに自分に必要な情報をびっしり書いている。数字に興味があり、友達の誕生日は全て覚えている。また、ストップウォッチやデジタルタイマーに強い関心をもっている。

○年齢相応の力を有しているが、他者との関わりに課題がある。しかし、本人は全く困り感を感じていない。学校、保護者と相談した結果、検査結果を本人に伝えて自己理解を促した。そして、相手の気持ちに気付ける格好いい中学生に変身するために、通級指導教室の利用を勧めた。「気づきと自覚により支援がスタートする！」



検査中は、子どもの話し方や指示の理解力だけでなく、表情、つぶやき、しぐさ、視線、姿勢、そして、検査に取り組む集中力や意欲等、数値に表れない言動にも注目し、実態把握に努めなければならない。